東洋史研究
第三十一巻第一號　昭和四十七年六月　發行

モンゴル狩獵考

原山煌

はしがき
一　モンゴルに於ける狩獵の種々相
二　モンゴルに於ける狩獵の意義
　㈠　娯樂的意義について
　㈡　政治的意義について
　㈢　軍事的意義について
三　遊牧社會に於ける狩獵の經濟的地位
あとがき

はしがき

古來、北アジアに根據した遊牧民族の間において、狩獵は大きな意味をもっていた。そのことは、古今を問わず當該地域について様々の形で言及した記錄の多くに、狩獵の記事があらわれていることによっても容易に想像しうる。狩獵の全

體的な姿をつかむには幾つかの視角があると思われる。その實際的な方法（狩獵の技法）については紙幅の關係もあって述べることはできないが、本稿においては、北アジア地域の狩獵について、特にチンギス汗のモンゴル帝國勃興期の流動的な社會狀況に焦點をあわせて、從來の研究[1]をふまえつつ、新たな意義を見出そうとするものである。

ところでモンゴル語には「狩獵」を意味する語がいくつかある。[2] 今その主なものを列擧してみる。

（Ⅰ） ABALA-x (авалах) vt. To hunt in a group or in a battue [L].; нэгдэж хомроголон ан хийх（合同して圍んで狩りをする）[M].

ABA (аб) n. Chase, hunt, battue [L].

（Ⅱ） ANGNA-x or ANGLA-x (агнах) vt. To hunt, trap or catch game [L].; ан гөрөө хийх（狩りをする）[M].

ANG (ан〈г〉) n. Beast(s), wild animal(s), game; hunting [L].

（Ⅲ） GÖRYGELE-x (гөрөөлөх) vt. To hunt [L].; ан амьтан агнахаар явах（獸を狩りしに行く）[M].

GÖRYGEN (гөрөөн) n. Hunting, chasing; game [L]. 〈Y = Ü〉

《なお [L] は、F. D. Lessing: Mongolian-English Dictionary, California, 1960. [M] は、Я. Цэвэл: Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь, Улаанбаатар, 1966. を示す。また語義を窺い知る一助とする爲に、各々の語について他動詞形と名詞形とを並列した。ローマ字大文字で示したのは文語綴りを轉寫したものであり、モンゴル新字形で示した括弧内の語は口語形である》

『モンゴル祕史』（以下『祕史』と略稱）には、（Ⅰ）の形が最も多くあらわれ、（Ⅱ）は同書については全く見えず、（Ⅲ）は僅かではあるが用いられている。この他、やや特殊な狩獵をあらわすものとしては、Šibawulaqu があらわれる。これは「傍譯」[3]には「放鷹」とあり、E. Haenisch の譯には、mit dem Falken jagen, beizen とある。[4] 以上が『祕史』

にあらわれる狩獵に關する言葉であるが、（Ⅲ）の形は、九節、十二節（共に卷一）に見られるものであり、何れも個人的に獸を狩りに行く場合に用いられ、その他は、（Ⅰ）が様々の形で用いられている。卽ち集團狩獵が記述に値するもの、或は記述に値する事件に附隨したものとして度々見えている。實際、『祕史』にあらわれる集團狩獵を仔細に檢討してみると、確かにそのどれもが重要な意味を內包しているといえるのである。

一　モンゴルに於ける狩獵の種々相

チンギス汗時代のモンゴルに關する史料の內に様々の形態で提示される狩獵をそれぞれの局面について檢討してみると、當然のことながら狩獵自體に量的な側面と、質的な側面とが複雜かつ微妙に絡み合いながら現れていることがわかる。狩獵の量的な側面とは、狩獵の規模を問題にするものであって、それは例えば參加人員の多寡を以て單純に分類することもできよう。また質的な側面とは、狩獵の各種の意義を明らかにしようとするものである。ここでは詳述しないが狩獵の主體が奈邊にあったのかということも質的な分析といえるであろう。[5] 狩獵を質的に分類することは、それが常に幾つかの要素を少しづつ程度を變えつつ併せもっている爲に、多かれ少なかれ形式的になろうとは思われるが、これを行なうことによってモンゴル帝國形成の過程に新しい意味を見出すことも可能であるといえるであろう。

先ず、狩獵の量的な側面についてであるが、これは大體次のように段階的にあらわしえよう。

(一) 個人的（乃至小グループによる）狩獵
(二) 部族乃至數部族を網羅する範圍の狩獵
(三) 中央集權的大圍獵

それでは次に、その各項について述べてみることにする。

(一) 個人的狩獵――ここで先ず擧げねばならぬのは、齧齒類狩りに代表される、最も勞を要せずして行ないうる單純な、採取經濟に最も近い位置にあるといえる狩獵である。[6] これは主として貧窮の境涯にある、或は下層階級の遊牧民によって行なわれていた。臣下たるべき氏族員に見捨てられたテムジンとその弟たちは、母と共に餘儀なく「土撥鼠 tarbaqan・野鼠 küčügür を殺して食ひ」[7]て飢えを凌いでいたのである。彼らはその他、細々と河魚をとったり、[8] 野草を採集したりして生活を維持した。[9] これは遊牧經濟の基幹たる家畜を奪われた遊牧民の、生存の爲の恐らくは唯一の手段であった。Б. Я. Владимирцов がこれを「悲慘事に算へられた」[10]と言ったのも無理はない。そしてこれはまた、チンギス汗の諸遠征の結果生じた多數の「奴隷」たちが辛うじて露命を繋ぐ術として行なった狩獵でもあったことは William of Rubruck も述べている。[11] Marco Polo もごく普通の遊牧民が齧齒類を食料とする爲に狩獵するのが稀ではなかったと指摘している。[12] 以上の記錄からして齧齒類などの小動物の狩獵は、專ら食料を得る爲のものであったといえよう。また近代に於ても、この種の狩獵が行なわれていたことは A. M. Позднеев などによっても述べられているが、[13] この報告によっても食用を目的としたこの種の狩獵は、遊牧社會では程度の差こそあれ、不斷に行なわれていたものと思われる。また兎のような敏捷な動物を對象とした個人的狩獵もあったことが「Yisügei-ba'atur は、二人の弟を伴って Čindaqa[14] はいないだろうか、と語り合って獵に出かけ、兩側で待ち伏せていた」[15]という『アルタン・トプチ』の記述から窺える。

次に個人的狩獵として忘れられてはならないのは鷹・隼或は鷲などの猛禽を用いて行なわれた狩獵である。[16] 『祕史』には、チンギス汗出現以前の條にも屢々鷹狩りの描寫がみえる。例えば Bodončar は「雛なる黃鷹 qarčiqai の野雞を捕へて喫ひ居るを見て、脊瘠ある尾短の脊黑の靑馬の尾の毛にて套作りて捕へて育て」[17]て、丹念に訓練を施して鷹狩りに用いている。卽ち「春になれり。鴨ども來ぬる時に、黃鷹を飢えさせて放」[18]って獲物を捕えるのである。鷹狩り用に訓練されたこのような猛禽は遊牧民の間にあっては垂涎の的であったらしく、Bodončar は遇々出會った人々から、それを讓ってくれるよう早速懇請されている。[19] 勿論、雛から有能な狩獵用の鷹へと手鹽にかけて育てあげたそれを Bodončar が手

離す筈がなく、彼は卽座にその要求を拒否している。Bodončar が鷹狩りをしつつ生活していたのは Onan-müren 河畔であったが、テムジンの父 Yisügei-ba'atur も「その頃也速該巴阿禿兒は、斡難河に鷹を使ひ行く時、……」とある如く、同じくこの地域で鷹狩りしている。William of Rubruck も、モンゴル人の間で盛んに鷹狩りが行なわれていたと述べている。[21] モンゴル人の鷹狩りに對する興味は常に大なるものであった。チンギス汗の四駿 dörben küliü'üd の一人、Bo'orču にとって至上の快樂は、春の日の鷹狩りであったし、もう一人の四駿 Boro'ul や幾人かの將軍にとってもそれは同樣であった。[22] チンギス汗の信任極めて厚い、草創期以來苦樂を共にしてきた遊牧戰士——非常に純度の高い、いわば prototype としてのモンゴル族ともいうべき者——のこのような鷹狩りに對する熱烈な傾倒は、それが遊牧民にとって經濟活動以上のものであったことを示している。またチンギス汗は屢々戰士のあるべき姿を狩獵用猛禽に擬しもしている。[23]

一二〇四年、テムジンに擊破された Naiman の Tayang qan は、テムジンと干戈を交える直前の或る時、その臣下 Köksе'ü-sabraq に怯懦柔弱なる事を

爾は、鷹を使ふこと圍獵すること二つより外に心も技も無し。[24]

と非難されているが、この言葉は假令無能きわまりない汗であっても鷹狩りや狩獵の技術くらいは身につけていたことを示しており、當時少なくとも支配階層の間では鷹狩りが一般的に行なわれていたと思われる。個人的な鷹狩りは、前述の Bo'orču や Boro'ul の言葉の如く、純粹に食料を得る爲の手段というよりは、娛樂的な要素が濃厚である。しかしながら、例えば Bodončar は食物を得る爲に鷹を捕え、馴らしたのであるから、娛樂の爲ばかりとは言いきれぬ場合もあったであろう。

以上述べたような個人的狩獵には法的、社會的な各種の規制が比較的少なく（及びにくく）、自由に行ないえたであろうし、また時期を問わず年間を通じて不斷に行なわれていたと思われる。それは個人的狩獵には經濟的要求が含まれること多大であったからに他ならない。

(二) 個人的狩獵の次には、當然強い血縁的結合によって形成された氏族 oboq 單位の狩獵についての考察が要求されるが、「古代」モンゴルに關する諸史料の中から原型的な氏族が行なった狩獵についての記事を檢出することは非常に困難である。數少ないその例の一つは、

豁哩剌兒台篾兒干は、豁哩禿馬惕の地の內、貂鼠・靑鼠・野獸ある地を差止め合ひて、憂へ合ひて、豁哩剌兒姓となりて「不兒罕嶽の野獸を捕るに好くある地好し」とて、不兒罕嶽の主人不兒罕孛思合黑三哂赤伯顏兀哥孩の處に起ちて來たりき。[25]

という記事にみられる。これは明らかに、氏族集團 oboqtu という母胎から新しい氏族が分岐析出されたもの[26]であり、その分離の原因が、人口增加に伴う亂獲を防止する爲であることから[27]、モンゴルに於ける狩獵に對する節度ある統制が窺え、ひいては彼らの狩獵への認識の深刻なるを思わざるをえない。それは、狩獵が彼らに貴重なる毛皮獸をもたらし[28]、もっと切實には食料を提供するものであったからである。支族の分離さえ餘儀なくさせたこの禁獵措置は、當時のモンゴルの食料調達が狩獵に大きく依存していたことを思わせる。

亂獲を防ぐ爲の禁獵規制については、地域的なもの、時期的なもの、及び數量を制限するものなどがあった。地域的規制については註(27)に村上正二氏の見解を示したが、時期的な規制については『黑韃事略』の徐霆の註記に「圍場自九月起、至二月止」とあり、その他にも秋から冬にかけて集團狩獵が行なわれていた事實を示す記錄が豐富にみられる。[29] また數量的制限については、『癸辛雜識』續集の「大打圍」の條[30]や、『北虜風俗』の、モンゴル人は愛惜生長の道をよく認識し、やたらに圍獵しないという記事[31]からも窺えるが、これは明らかに獵獸の種族保全の策であって、Juvaini の傳える「生き殘りの獸に對する助命嘆願」[32]もこの思想の variation でなければならない。斯樣に各種の禁獵規制が一般的に實施されていたことからも、モンゴル人の狩獵という經濟的營爲に對する重大なる關わりが理解されよう。

部族單位での狩獵は、卷狩り（圍獵・打圍）という形式で行なわれた。『祕史』には、この種の集團狩獵の描寫が頻繁

に現れる。例えば卷三には、To'oril Ong qan がテムジンらと共に Merkid を討滅して軍を引く時に、

不兒罕嶽の背より訶闊兒禿主兒不を過ぎ合察兀喇禿速卜赤惕、忽里牙禿速卜赤惕を過ぎ、その野獸を圍獵して、土兀剌の黑林を指し退きたり。[32]

とあり、卷六には Kereyid 部と雌雄を決する前、テムジンが「起ちて來る時、行糧（野獸）を圍獵しつつ」[34]行ったと述べられている。またテムジンは Sübe'etei に Merkid の殘黨を追わしめた時に、糧食を調達する爲には卷狩りをすべきであるが、あまり過度にそれを行なうことは愼しむよう命令している。[33]これはいわば遠征に際しての常識であったと考えられるが、『蒙韃備錄』にも、同樣の記事がみえる。[35]

またこの種の圍獵は、數部族合同で行なわれたこともあった。Tayyiči'ud 部に屬する照烈 Jewüreyid 族は、テムジンに共に「合圍」して獸を狩ることを勸められ、その時人員裝備など全ての面において著しく不如意であったにも拘らず、圍獵のあとで對等の場合以上の分配を受けた。Jewüreyid の人々は、彼の度量の大なることに強い感銘を受け、彼をば「人君之度」ある太子であると稱讚したという。[37]またテムジンはイヌの歲（一二〇二年）Kereyid の To'oril Ong qan と同盟したが、その時彼らは

多き敵の處に奔るには、共に一つに奔らん。野の獸の處に圍獵するには、一つに共に圍獵せん。[38]

と互いに誓い合って「父子」となっている。

このように、卷狩りに際しては、樣々の政治的接觸も生じたのである。そしてそのような機會に初期的な階層分化が進行し、強力なる個人、或は部族の周邊には、個人または氏族・部族さえもが身を寄せ、吸收されて行くという現象が生起し、その結果として ulus（部族國家）という政治的集團が現出するに至るのである。圍獵の形態は、汗の權力が唯一至高のものへと具體化・強化されて行くにつれて質・量ともに顯著で鋭い變化を示す。では次に卷狩りの最も完成された段階ともいうべき中央集權的大圍獵について見てみたい。

(三) この段階の圍獵の最大の特色は、規模が非常に擴大することであろう。この點については『癸辛雜識』續集の記事[38]が中國側の同時代史料としては最も詳細であるが、それはこの種の大圍獵が參加人員の多さ、實施範圍の廣大なること、獲物の量の厖大なることにおいて比類がないことを示しているし、『黑韃事略』にも卷狩りの網羅する範圍の廣さを示す記述がある。[40] チンギス汗の深い信頼を得ていた耶律楚材の詩の中にも「成長圍不知幾千里」とか「長圍一合三千里」などとよまれ、[41] その規模の大きさに驚嘆しているのがわかる。

西方史料には、このような大規模な卷狩りについて豊富な見聞がみられる。例えば Juvaini は、チンギス汗の大圍獵について、それは冬の季節の始まる時に行なわれ、一、二ヶ月、或は三ヶ月に亙って狩りの圍みを作り、獲物が逃逸しないように注意しつつ、徐々にゆっくりと獲物を前に驅りたてて定められた場所に取り圍んで狩獵するという。[42] またチンギス汗は Qulan-Bashi に駐屯している時、彼の長子 Joči に遙かキプチャク草原から夥しい數の野生ロバを主とした獲物を驅りたてて來させている。[43] 途中の距離を考えると (J. A. Boyle 氏の比定によると Qulan-Bashi は、現今の Chimkent と Aulie Ata の間の地域であるという) この驅り立ての大規模なことがよくわかる。Marco Polo は、Qubilai qahan の治世下に行なわれた大圍獵について述べているが、そこでは分業化が著しく進行している。例えば、Cuiucci・Toscaor・Bularguci[44] それに「鷹匠」[45] などの職掌が擧げられているが、それらの存在は大圍獵の運營の圓滑化を最大の目的としていたのである。そして彼の記錄からは、強力な權威の下に行なわれる卷狩りの規模の極端な伸張も知りうる。三月に開催される鷹狩りには實に一萬人あまりの鷹匠が扈從するというし、一萬人で構成される獵犬係 Cuiucci の活躍もそこには傳えられている。[46] さらに彼の記述で注目すべきは、大汗の權力が確固不拔のものへと成長すると、全く新しい型の狩獵が出現しているということである。それは Qubilai の統治原理を如實に象徴するような、換言すれば非遊牧民的・非狩獵民的な、いわば農耕社會的性格を色濃く帶びた狩獵であった。卽ち中國の諸王朝に於ては普通に行なわれていた、牆壁を繞らしてその內部に各種の野獸を放ち、それを狩るという仕方の狩獵を行なっているのである。Marco Polo によると、その

爲の園囿は上都の宮殿に接して造られていて、十六マイルの牆壁によって圍まれており、大汗は二百羽以上の隼や多くの狩獵用の猛禽、或は豹などをそこに氣の向くままに放って樂しんだという。[63] 十四世紀初、英宗乃至晉宗の治世に元朝中國を訪れた Odoric of Pordenone の報告も、この種の狩獵に言及している。[64] この兩者の說くところからは、權力を確立したという絕大な自信のもとに、なるべく體を動かさない（運動性の缺落した）狩獵を志向し、遊牧民的要素を次第に失なって行く大汗（及び支配階層）の姿が浮き彫りにされてくるであろう。

二　モンゴルに於ける狩獵の意義

次に、チンギス汗時代のモンゴル遊牧社會で行なわれた狩獵の含みもつ樣々の意義について分析を加えたい。いうまでもなく、遊牧社會での狩獵は幾つかの要素を常に併せもっていた。L. Krader は正しくも、彼らの狩獵が社會的、政治的そして經濟的などの諸要素から成り立っていることを指摘している。[65] ここでは、㈠娛樂的・㈡政治的・㈢軍事的の各要素について解明を試みたい。

㈠　娛樂的意義について

モンゴル人の間における狩獵は、多くの場合、娛樂的要素（recreation, sport としての）を帶びていた。とりわけ、既述した如く Bo'orču やその他の幾人かの遊牧戰士にとって、男子最大の樂しみは氣儘な鷹狩りであったことからも理解できるように、北アジアの遊牧民の鷹狩りに對する熱中ぶりは非常なもので、例えば・W. W. Radloff のシベリア日記にも、鷹狩りは「最も普及し、最も好まれる仕事」[66] といわれている。またモンゴル人の傳える民話にも狩獵用の鳥と、その主人たる狩人の間の交情の物語がみられることからも、彼らの鷹狩りに對する多大の愛好心が窺えよう。

彼らの狩獵に對する傾倒は但に鷹狩りにとどまらない。Kereyid 部との戰鬪の際に負傷した Quyildar は、卷狩りが

行なわれるや、主君テムジンがとめるのも聽かず、生命の危險をも顧みず獸を追擊し、病勢惡化し死亡している。[54] そしてチンギス汗自身にしても西域遠征の際、狩獵を行ない大豕を追うち落馬して負傷したが、その時丁度居合わせた長春眞人に諫止されたにも拘らず、チンギス汗は婉曲にこれを斥け、僅か二ヶ月ほど出獵を中止したにすぎなかった（それとても恐らくは負傷の回復を待つ爲であって、長春眞人の諫言の倫理性に從ったものとは言い難い）。Ögödei qahan も全く同樣に耶律楚材の諫言を無視して病氣をおして出獵し、間もなく崩御したというし、[55] 峻嚴なる性格で知られる Möngke qahan も殆ど唯一の樂しみとして狩獵には格別の愛着を示している。[57]

これら一連の、類型的ともいうべき行動言辭をみる時、モンゴル人にとって狩獵は抗し難い魅力を內包した行爲であったことが理解されよう（但し、Quyildar の場合は自分自身の狩獵に對する興味のほかに、遊牧戰士としての汗に對する義務をあくまでも忠實に履行しようとしたのではないかとも推察しうる。というのは、汗の身邊にある者は「我等鷹使ひ圍獵する時、宿衛は我等と共に鷹使ひ圍獵しに行け」[58] というような任務を本來的に要求されていたからである）。遊牧民本來の狩獵を愛好するという傾向——例えば『大金國志』には「金國酷喜田獵」[59] といわれる——は、チンギス汗時代のモンゴルに於ても決して衰えることなく確固として存在したことは明らかである。この意味からも Juvaini が、狩獵はモンゴル人にとって great sport であるという表現をしているのは肯綮に當るといえるであろう。[60]

(二) 政治的意義について

集團狩獵は多くの人數が集まることを常に要求するものであった爲、當然その際に諸種の政治的接觸が發生した。政治的な動向という觀點からすれば、狩獵はいわば觸媒的な役割を果していたのである。そこでここでは、ⓐ汗が實權を確立して行く過程を狩獵という局面からとらえ、ⓑ強力な支配機構を完成してからの狩獵の意味を追究する、という二點に問題をしぼって論を進めたい。

ⓐ汗權力確立過程に於ける狩獵の役割――遊牧社會に於ける原初的な汗は、政治的實權を殆ど持っていない。集團狩獵、或は特殊な局面たる戰鬪など、多數の人間が團結して統制ある行動を要求される時、「支配者」ではなく「指導者」としての汗が quriltai（聚會）で選出されたのである。『祕史』の卷六には、テムジンが汗となった時（第一次卽位をいう）の選出の様子が詳細に述べられているが[61]、それは汗に選ばれることが當時は直接的には權力の獲得を意味するものではなかったことを示している。それ故、汗は「不定の群の常に動搖する不定の權力を持った蜉蝣のやうな指導者であった[62]」という Б. Я. Владимирцов の指摘は正鵠を射ているといわねばならない。秋季に五十人乃至二百人程度の人々が集まって指導者を選出し、驅り立て獵を行なったという P. S. Pallas の記錄[63]は、「指導者」としての汗の原型を想起させるものがある。卽ち狩獵や戰鬪などに際して豐かな經驗、優秀なる判斷などを備えた者、これを要するに人望を集めうる者であれば汗に選ばれえたのであり、その任務たるや明らかに一回性的かつ暫定的なものにすぎなかった。例えばテムジンの父 Yisügei-ba'atur が Tatar 部の者に毒殺されると、その部衆は「深き水乾きたり。光る石碎けたり[64]」と言って、いとも簡單にその遺族を見捨てた。まことに「忙豁勒に君なく、いかにか過さん、汝等[65]」という To'oril Ong qan の言葉の如く、常に「指導者」としての汗を必要としながらも、或る汗が死亡するや、直ちに別のそれを求め始めるというのがこの段階に於ける實狀であった。

しかし汗となるべき者の內でも特に資質が卓越している（『祕史』の表現には「その目に火あり、その面に光あり[66]」という）と見做される個人が出現すると、その周邊に諸種の寄身が行なわれるという現象が生じる。チンギス汗以前にもこのような動きはあったが[67]、チンギス汗の場合について『祕史』をみると、Arulad 族出身の Bo'orču の如く苦難時代のテムジンの許に僚友 nökör として投じたもの[68]、Üriyangqai 族出身の J̌elme のようにテムジンの誕生祝いとしてその臣たるべく親によって運命づけられていたもの[69]、更には Hö'elün eke の育てた四人の拾い子（Küčü, Köktöčü, Šikiken-quduqu, Boro'ul）の如く他部族との抗爭の際に得られた幼兒達[70]などがあり、その他ごく普通の歸屬も多くみられたのである。この

ように様々の形で自分自身に心服せる一團、支持者群を私有するに至るのである。

そしてチンギス汗は、このような情勢を背景として、あらゆる機會に寛宏なる度量を社會に表示するのに全力を傾注しはじめる。例えば彼は、「テムジンは自分の着ている衣服を脱いで人に與え、自分の乘っている馬から下りてそれを人に與える」[71]との評判をたてられたが、それは彼の意圖が順調に進捗していることを示している。蓄積された私的な實力の保障のもとに展開されるこれら一連の行動は群小部族を引きつけるに充分な新鮮なものであった。チンギス汗は自身の苦難の經驗をもとにして、新しい汗のあるべき像を樹立しようとした。卽ち汗を一回性的な、常に脆弱性を孕んだものではなく、實權を伴った確固たる存在にしようとしたのであり、その爲にこそ、完全な信賴關係に立脚した從士團の增強に盡力したのである。實際彼は強大化の過程で、汗という存在の確實性を否定する全ての行爲を排することに努めた。卽ち彼に敵對する汗であっても、それが轗軻不遇の境涯にあって部民に裏切られて連行されてきたような場合には、その汗を處分するより先に裏切り者たる臣下を嚴しく處刑している[72]し、それとは對照的に、逆境にあり乍らあくまでも自分の汗に從って運命を共にしようとした者は、假令捕えても却ってこれを恩賞している[73]。

チンギス汗は遊牧社會に新しい倫理觀を要求し、それを確立すべく努力していたことが理解されるが、彼にそれをなさしめたのは、父に從っていた部民が、その死と共に當然のことのようにその遺族を捨てるという、極めて機會主義的で冷嚴な關係を目の當りにしたという體驗に他ならなかったであろう。そして斯樣な意圖を實現するには、他の集團と接觸する機會が多い卷狩りなどが利用すべき絕好の場となったことは、先に述べた Jewüreyid 族との「合團」の例から明らかであるが、チンギス汗のこのような意圖が進行し明白になると、彼の許への歸屬がますます活潑になる（その場合、歸順の仕方、時期的な遲速などが、チンギス汗の信賴の深さ、待遇の如何に直接關係したのは當然である）[74]。これは明らかに、狩獵をはじめとする他部族との平和的交流の場を見逃さず、巧妙にとらえたチンギス汗の卓拔なる政治的感覺に起因するものであった。では次に、中央集權的支配體制の下で行なわれた狩獵のもつ意味について考えてみたい。

ⓑ中央集權的支配下に於ける狩獵――汗の獨裁權力が樹立され、整備されて不動のものとなると、そこで行なわれる狩獵に新しい型がみられるようになる。ここでは極めて大規模な圍獵の政治的意義について述べる前に、從來看過されてきた點を明らかにしたい。

それは少數の供回りを連れての、俗にいう「お忍び」的な狩獵が行なわれていたという事實である。Juvaini は Ögödei の行なったこの種の狩獵行について記錄しているが、それは直接征服地の社會に接觸する機會が殆ど皆無といってよかった彼にとっては民情視察の絶好の場であったし、それはまた冷酷なる征服者としての大汗像を仁慈厚情の君主という強烈な印象に置きかえる征服地の民衆への對策という政治的意圖を併せもっていた點を見逃してはなるまい。Möngke qahan は、その子 Asutai が被征服民を狩獵中に傷つけたと知るや、これを嚴しく叱責している。Möngke も Ögödei と同樣に征服地社會の民心の離反を何よりも恐れていたことが窺える。

次に問題とすべきは最高度に整備された大圍獵である。ここに於ては元來一人の狩獵者の一身に集中していた狩りの爲のあらゆる機能が截然と分業化されている。即ち斥候・勢子などの圍獵の場を成立せしめる部分、そして實際に「狩獵」――つまり矢を射て集められた野獸を殺すだけの、享樂行爲としての狩獵――を行なう者、また職掌のはっきりと規定された官人（これについては Marco Polo の記錄したものを先に述べた）などからなる。これは見事に整備された千戶制を背景にしており、一方では自己に課せられた任務のみを忠實に果すことを強制された大多數の人々の報われることのない勞苦があってはじめて成立しえた。從って三ケ月も前から斥候を放って廣大な圍みを形成するような周到な準備のもとに行なわれた大圍獵の實施は、指揮系統が末端にまで遺漏なく及ぶという前提なしにはとても考えられない。即ち支配權力が名實ともに定着し、確立した狀態にあってのみこの種の大圍獵が可能になったのである。Juvaini は、チンギス汗がこのような狩獵を行なったと記錄しているが、それはチンギス汗の、彼自身の帝國の建設事業を完成したという高らかな宣言であり、誇示であったといえよう。またそれは一旦作りあげた支配機構が、意圖した通りに狂いなく作動するか否かを點檢す

る場でもあったのである。

㈢　軍事的意義について

モンゴルにおける集團狩獵の軍事的意義については、Juvaini が「彼（チンギス汗）は狩獵に對して大きい注意を拂っていた。そして野獸を狩るということは軍隊の司令官に相應しい仕事であると常々語っていた。狩獵の際の教育と訓練は、戰士、兵隊の義務であった。如何にして狩人が獲物に追いつくか、如何にしてそれを狩るか、どんな具合に彼らが配列するか、そしてそのあと人數の多少に應じてどのように獲物を包圍するかといったようなことを學ばなければならなかったのである」[78]と、大圍獵に於ては軍隊の教育と訓練とが非常に大きい比重を占めていたと強調した爲に、モンゴルに於ける狩獵を考察する場合には、常に重點をおいて扱われる問題となるに至った。この問題については古くは Б. А. Рязановский が精緻な檢討を行ない、殆ど分析しつくしているように思われるので[79]、ここでは詳述しないが、彼の見解のうちで特に重要と思われるのは、兵士と獵師の身分・任務が重複している點と、卷狩り形式の狩獵の起源が「蒙古民族の慣習及び生活中にある」[80]という點とを確認していることであろう。事實 Juvaini をみると、大圍獵が食料調達に優るとも劣らぬ程度に軍事演習として重視されていたことがよく理解される。そこに於ては、戰鬪時と全く同樣に斥候を放ち、傳令を走らせ、軍を集めて司令部で作戰を與え、武器や裝備が分配され、糧食まで携えて行く。そして卷狩りの最後には、野獸の群が兵士の齊射を受けて殺されて行く有樣を大汗は高處から眺め、檢分して事後にその「作戰行動」を批評するという。[81] Juvaini のこのような記事を一見すると、この種の大圍獵では軍事的目的が至上のものではなかったかという印象さえ受けるほどである。耶律楚材もその詩に「天皇冬獵如行兵、……長圍布置如圓陣」[82]とうたって、その演習としての性格を強調している。集團狩獵が軍事演習と不可分に結合していたことは、モンゴルの軍事力を不斷に研磨するに資するところ大なるものがあったと思われる。規律の明瞭でない漫然たる圍獵は經濟的效率が低下するために避けられるべきものであ

り、その意味から圍獵の軍事演習の要素を強化すると、比例的に狩獵本來の目的であるべき筈の獲物を多く得るという經濟的要求もより大きく滿足させるのである。それ故、集團狩獵には、その發生時から軍事的性格の萠芽が確實に存在していたといえるであろう。

三　遊牧社會に於ける狩獵の經濟的地位

チンギス汗が權力を確立して行く過程で「森林の民」は「草原の民」に次第に壓倒され、吸收されて行くという現象が生じたが[33]、モンゴルに於ては古くからこの「森林の民」の間で狩獵が日常的かつ盛んに行なわれていたものと考えられる。その起源が石器時代にまで遡及しうることは多くの考古學的業績、とりわけ petrograph の歷然たる證據が何よりも雄辯に物語っているが[34]、それらをみると原始時代に既にかなり組織的な集團狩獵さえ行なわれており、狩獵經濟の傳統の悠久なるを思わせずにはおかないし、「弓矢の發明と共に野獸が普通の食物となり、狩獵が正常的な勞働部門となった[35]」という Ф. А. Кудрявцев のブリヤートにおける狩獵經濟の定着についての見解をも裏附けるものであるといえよう。

「森林の民」の狩獵については、例えば『元史』の、イェニセイ河上流域に住む吉利吉思[36] Kirgis や、バイカル湖西部に根據する撼合納[37] Qabqanas などについての記事は、それらの生活が如何に狩獵に依據するところ大であったかを示すものである。當時のモンゴルの「森林の民」の間では狩獵――食料を得る爲だけではなく、毛皮を得ることも非常に重要な目的の一つであった[38]――や、漁撈・自然物採取が生業として一般的に行なわれていたのである。A. Ю. Якубовский も「遊牧民は特に森林附近に遊牧するときは卷狩り類似の狩獵を行ふ[39]」（傍點筆者）と述べ、遊牧民の狩獵は森林地域の近くでより重點的に行なわれていたという限定を加えつつも、「草原の民」としてのモンゴルの經濟生活にも重要な役割を果していたことを指摘している。

では「草原の民」としての、または「森林の民」の一部を吸收した形でのモンゴル社會に於ては、狩獵はどのような地

位を占めていたのであろうか。『黑韃事略』には獵獸の肉が食用として重要視されていたこと、[91]彼らの狩獵に關する才能のすぐれていることなどを述べて狩獵の生活上に果した役割の大きさを示しているし、『長春眞人西遊記』にもケルレン河畔地方の記述に際して前者同樣の觀察を遺している。[92]西方からの旅行者の證言からもそれは明らかとなる。例えばJohn of Plano Carpini は「タルタル人は食べられるものなら何でも食物にいたします。といいますのは、犬・狼・狐・馬を食べ」[93]ると言い、更に「またわたしは、かれらが鼠を食べるのも見たことがあります」という。また彼は、モンゴル人は夏季には肉は滅多に食べないが「狩獵中に何か動物か鳥かを捕えた時」には、それを食べるという。William of Rubruck の手記には、モンゴル人が狩獵によって多量の食物を得ているとあり、[94]彼らが鼠などの小動物を食べ、食べられる動物とそうでない動物とを熟知していたともいっている。[95]また Kirakos of Ganjak の記錄にも「彼らは清潔たると不潔たるとを問わず、あらゆる動物を食べる」[96]とみえるし、Marco Polo も同じような記述をしている。[97]そしてこれはまた近代のモンゴルへの旅行者も等しく裏附けるところであった。[98]モンゴル帝國以前の遊牧民族についての中國の記錄をみても、狩獵の經濟的重要性と一般性とは明らかである。[99]

また多くのモンゴル學研究者も同樣の見解を示し、狩獵の重要性を程度の差こそあれ積極的に評價している。[100]ところで岩村忍氏は最近の勞作の內で「『森の民』を除いては、かれらの經濟生活において狩獵の占める地位は大きなものではなかった」[101]と述べておられる。確かに「森林の民」と「草原の民」のそれぞれに於ける狩獵は、その仕方、目的など樣々の點において大きい差異を示している。[102]しかし「草原の民」の行なった狩獵には、それなりの拔きさしならない重要性が認められる。これについては後に述べることとなろう。また岩村氏は『祕史』が屢々狩獵の記述をしているのは、狩獵が一般的に行なわれていたという證にはならず、かえって珍らしい行爲であったからこそ殊更描寫されているのであって、その論據として、遊牧生活についてはそれが日常的かつ普遍的に行なわれていたから取立てて記述されることがなかったのであると主張される。[103]しかしモンゴルにおける樞要な生業である遊牧は、いかに「水草に隨って」畜牧するとはいっても、

それは大略一定の地域の定期的な移動を行なうにすぎない[004]のであって、自ずから限定された動きしかできない。それに比して狩獵の場合にはその運動性はずっと大きい。即ち他の集團と接する機會が當然生じるわけであり、その際に甲から乙へ何らかの刺戟が生じ、何らかの關係が發生することは前章に述べた通りである。他の集團と接觸する機會が多いということは、史書に採りあげられるような事件が生起する可能性も、遊牧を行なう場合よりはずっと大きいということである。『祕史』に狩獵の記事が多いのも、狩獵自體を描寫するのが目的ではなく、それに（それが）附隨している狀況や事件を書きとめておくことが最も主要な目的であったのだ。[005]このように『祕史』に狩獵の記事が散見されることから、直ちに「草原の民」（的要素の強い）モンゴル人の間にあっては、狩獵の經濟的意義が大きいものではなかったとはいえないことが明らかになったと思う。これらの理由によって、洋の東西を問わずモンゴルを訪れた人々の統一的な見解——即ちモンゴル帝國時代のモンゴル社會で狩獵が重要な經濟的位置にあったという——を否定すべき根據はないように考えられる。

かえってモンゴル人の慣習に深く根ざしたものとして作られた法的規制の内にも、狩獵が彼らの經濟的基礎を形成していたという印象を與えるものさえ見出せるのである。チンギス汗の格言 bilig には、

軍を指揮すべき練達のベキは、狩獵に從ひてその名を擧ぐるが如く、戰を行ふ時にも各々その名と力とを表はすべし。[006]

という一條があるが、これは戰鬪という特殊な狀況下における行動の規範を、日常的な營爲である狩獵に求めているものである。またチンギス汗の法令 jasaq にも、

彼は怠慢なる兵士及び狩り立てたる獸を逃逸せしめたる獵師は之を處罰することとし、之に笞刑、時としては死刑を科せしめたり。[007]

という項目がみえるが、これは狩獵が彼らの生活に於て重大なる地位を占めていたことを明示するものであるし、時には

死刑に處する場合さえあるという言から、完全に身についた狩獵の技術であったからこそ、失敗に對しては苛酷とも思える態度で臨んだのであると考えられる。彼らの優秀な弓射技術については、他處よりモンゴルを訪れた人々の少なからぬ驚嘆を伴った描寫によっても補強されるであろう。『蒙韃備錄』[108]、『黑韃事略』[109]は何れも彼らの騎射の天性の卓越せる素質にふれている。『祕史』には、少年テムジンが雲雀 biljü'ür を鏑矢 godoli で射止めたと自ら述べている記事があるし、[110] John of Plano Carpini も「大人であろうと子供であろうと誰でも弓がとても上手なので狩獵を行ない弓の稽古をします。そしてタルタル人の子供たちは二、三歳になるとすぐ馬に乘ってうまくこなしだし、ギャロップで駈けはじめます」[111]という。これらの史料は、モンゴリアの草原地帶では諸種の事情から狩獵經濟は成立しえないという主張[112]に基本的な修正を餘儀なくさせうるであろう。以上述べ來たったように、チンギス汗時代のモンゴル社會にあって狩獵は、「森林の民」と「草原の民」との間に明瞭な意義の相違こそあっても、その雙方に於て生活を支える經濟的基幹をなす生業であったといえよう。

それでは當時の遊牧社會に於て狩獵と遊牧の二つの經濟的營爲は如何なる相關關係にあったのか。遊牧經濟の基礎をなすものは、いうまでもなく家畜であり、それは牧畜技術の未發達なることもあって貴重な財産とならざるをえず[113]、その自給の爲の餘剩はきわめて限られていた。このようないわば粗放な牧畜方式は、前提として斃死する家畜の減少分が見込まれたうえで初めて成立しうるものであったといえる。[114] 元來增殖を目的とすべき筈の、財産としての家畜の斯様な餘儀なき減少は、遊牧生活を營むうえで大きい障碍となったに相違ない。この事態を決定的に克服する有效な手段がない以上、家畜の減少を防止する最も基本的で實際的な術は家畜の屠殺を極力抑制することであった。[115] モンゴルにおいて特別に家畜を屠殺するのはハレの場合に限られており、家畜の肉を彼らが食用としてとりうるのは、それが死亡した場合が一般的であった。彼らの屍肉食用習慣は、彼らが食生活において家畜に容易に手をつけることができなかったという事情を示すものでなければならない。例えば William of Rubruck は「彼らの食物についていうと、彼らは無差別的に死んだ動物の肉

を食べる。多くの羊や牛の群がいるので、たくさん動物が死ぬことが避けられないのである[117]」と言い、馬か牛が死ぬと直ちにその肉を加工して保存用食肉にするとも述べている。[118]また『祕史』は、Bodončar が「狼の喫へる（喫ひ殘せる）を拾ひて喫」ったと記している。A. M. Позднеев は、モンゴル人は平氣で病死した動物の肉を食べ、しかも決して中毒しないが、それは肉が大氣と日射によって消毒されるからであるといい、モンゴルの役人の言葉として、モンゴル人は家畜が斃死した時にこそその肉を飽食することができると記している。[119] A. Д. Каллиников も「一般蒙古人は普通非常に必要とする場合以外には家畜を屠殺しない。そして寒氣かあるひは野獸に斃れた家畜の肉を食用にする[120]」と述べている。これらの記述からモンゴル遊牧社會においては家畜屠殺を可及的に避けていたことがよくわかる。卽ち遊牧經濟を成り立たせる爲の最も卑近な努力として、食肉を現に保有せる（生きている）家畜以外から求めることが行なわれていたといえる。先程來述べたようなモンゴル遊牧民の間での各種狩獵の盛行は、この要求に的確に合致するものである。縮小の許されぬ唯一の貴重なる財產たる家畜を保全する爲の「基盤」となったのが彼らの間に行なわれた狩獵であった。彼らが何の躊躇もなく野獸の肉を食用に充てていたという多くの記錄は、この主張の強力な裏附けとなりうる。

元來純粹の遊牧經濟というものは、多くの研究において論證されたように有りうべからざるものであって、[121]何らかの他の經濟形態を「基盤」として援用することを俟って初めて成立しうるものである。ここでいう他の經濟形態とは、遊牧社會が本來的にもっていた宿命的ともいうべき脆弱性——それを惹起せしめる最大の原因は相對的人口增加である——を保障すべきもので、それこそが今迄述べてきた狩獵であり、[122]地域によってはその他のものであった。[123]それ故、Б. Я. Владимирцов の、狩獵はモンゴルにおける遊牧にとって「殘滓」であったという言は適切ではなく、それは實際にはもっと大きい位置を占めていたのではあるまいか。それは遊牧經濟の活動を營む際において必要な初速度を與える役割を果したといえるであろうし、また絕えず潛在的な「基盤」として、ともすれば硬直化しがちな遊牧經濟に flexibility をもたらし、その成立を支え續けたものであるといえよう。

あとがき

以上考察したように、チンギス汗時代のモンゴルにおいて狩獵は、從來述べられてきたように政治的・軍事的に重要な意味をもっていたというばかりでなく、經濟的にも遊牧經濟の「基盤」を形成するという看過すべからざる役割を果していたのである。本稿では觸れることができなかったが、その「基盤」が狩獵であるか、或は何らかのその他のものであるかによって、その社會自體の性格や強度にも當然差異が生じるものと思われる。

今後の課題としては、そのような前提をもとにして、多くの部族が割據する狀況からモンゴル部が、他の部族を壓倒して驚くべき發展を遂げた過程を跡づける必要があろう。チンギス汗が卓越せる政治的手腕の持主であったということは周知の事實であるが、それだけでモンゴルの爆發的な發展を說明するのではなく、むしろその背景にあった當時の社會がそのような行爲を受け入れうる素地を釀成していたということこそに注目しなければならない。またそれと併せて、狩獵經濟そのものの各樣の在り方を追究する——卽ち「森林の民」、「草原の民」の各々における狩獵の實相（具體的な技術・方法など）と、狩獵に對する精神的な對應（つまり狩獵についての儀禮・傳承など）を明らかならしめ、かつこれらの諸點からこの二つの「民」の相違と關わりを整理するなど——ことも必要であろう。

註

(1) 遊牧民族の狩獵に關する論著。Die Jagd bei den altaischen Völkern, (Asiatische Forschungen Bd. 26) Wiesbaden, 1968.（第八回國際アルタイ學會 PIAC での發表論文を收錄）。E. Haenisch; Die Abteilung „Jagd" im Fünfsprachigen Wörterspiegel, (Asia Major X) 1934.（『五體淸文鑑』武功部の畋獵類・頑鷹犬類に見える一三六の狩獵に關するモンゴル語の注釋）。C. R. Bawden; Mongol Notes, II. Some "Shamanist" Hunting Rituals from Mongolia, (Central Asiatic Journal, XII—2) 1968. (Rintchen; Les matériaux pour l'étude du chamanisme mongol, I〈A. F. Bd. 3〉; II〈A. F. Bd. 8〉, Wiesbaden, 1959~1961. のうち、狩獵についての資料の譯註)。P. Poucha; Die Geheime Geschichte

der Mongolen, als Geschichtsquelle und Literaturdenkmal, 〈Archiv Orientální Supplementa, IV〉 Praha, 1956.（特に第五章に狩獵の言葉の分析がみられる）。N. Poppe; On Some Mongolian Names of Wild Beasts,（CAJ, IX—3）1964.（モンゴル語の狐・狼・熊についての分析）。R. C. Andrews; Across Mongolian Plains, New York, 1921.（日四一良譯『蒙古狩獵行』生活社、一九四一年）。また我國においては、青木富太郎「古代蒙古人の共同狩獵制と兵制」（『加藤博士還曆記念東洋史集說』所收、一九四一年）、川久保悌郎「清代滿洲の圍場」（史學雜誌五〇—九、一〇、一一、一九三九年）、島田正郎「モンゴルにおける狩獵の慣習」（法律論叢二八—一、一九五四年）、「モンゴリアの遊牧の民における狩獵の神事について」（東方學一三、一九五七年）、千葉德爾『狩獵傳承研究』『續狩獵傳承研究』（風間書房、一九六九・一九七一年。本書は日本の狩獵傳承について專ら述べているが、極めて多くの示唆を得た）など。

(2) 言葉による「狩獵」の分析は、最近では S. Jagchid と C. R. Bawden が、'Notes on Hunting of Some Nomadic Peoples of Central Asia'（Die Jagd bei den altaischen Völkern, 前掲書所收）なる論文で行なっているが、これには賛同し難い。即ちそこでは、ang と aba の二つが相對するものとして擧げられており、註において görügeleku と sibaralaqu を附記しているが、彼らが該論文で扱っている問題から考えても『祕史』にしばしば現出する repoe 系の「狩獵」を注記にまわしているのは不自然であろう。この ang 系の言葉は『祕史』には見えないが、筆者の目睹しえたものの一例としては、angla-n として『アルタン・トプチ』の十一節にあらわれたものがある〔C. R. Bawden; The Mongol Chronicle-Altan Tobči, Göttinger Asiatische Forschungen Bd. 5. Wiesbaden, 1955. p. 39 (text); p. 117 (translation)〕。

(3) 『元朝祕史』（四部叢刊本）。

(4) E. Haenisch; Wörterbuch zu Mangḫol un Niuca Tobca'an, Wiesbaden, 1962 (Nachdruck der 1939). p. 139.

(5) 狩獵の主體は、遊牧社會が中央集權的志向を示して政治的變貌を始めると、その過程に從って轉換して行くように思われる。その轉換に最も大きい作用をもたらすものの一つは「指導者」から「支配者」への汗の變質であったのではないか。

(6) William of Rubruck の傳える所によると、モンゴル人は sogur とよばれるモルモットを冬期二、三十匹かたまって一つ穴に冬眠しているのを一時にとるといい（W. W. Rockhill (tr. & ed.); The Journey of William of Rubruck to the Eastern Part of the World, 1253—1255. London, 1900. p. 69.）、『祕史』の九〇節（卷二）には Belgütei が一日で馬一頭荷分の tarbaqan を狩ったとあることからも齧齒類の狩獵が比較的容易であったものとみられる。また J. H. Miller も、モルモット狩りの方法を詳しく述べている。（D. Carruthers; Unknown Mongolia. A Record of Travel and Exploration in North-West Mongolia and Dzungaria, 2 vols. London, 1914. II. p. 342.）

(7) 『祕史』八九節（卷二）。なお本稿中の譯文は、那珂通世譯

註『成吉思汗實錄』（大日本圖書、一九〇七年）によつた。

(8) 『祕史』七五節（卷二）。

(9) 『祕史』七四節（卷二）。

(10) Б. Я. Владимирцов; Общественный строй Монголов, Ленинград, 1934.（外務省調査部譯『蒙古社會制度史』生活社、一九四一年）九〇頁。

(11) W. W. Rockhill,1900: p. 68. には、「奴隷は穢ない水を飲み、またこの地のいたる所に棲息する各種の鼠を捕えて食べる」とある。

(12) Aldo Ricci; The Travels of Marco Polo, translated into English from the Text of L. E. Benedetto, London, 1931.（愛宕松男譯註『東方見聞錄』二卷、平凡社、一九七〇—一九七一年）一、一四八頁。

(13) 彼によると、一八九三年 Хла-чжононьгунэй хошун で tarbaqan を料理して食用に供するコルトがあつたという（A. M. Позднеев; Монголия и Монголы, СПб, 1896 (т. I); 1898 (т. II). т. II. стр. 470)

(14) čindaqa: white hare or rabbit, polar hare. (F. D. Lessing; Mongolian-English Dictionary, p. 188.)

(15) C. R. Bawden; The Mongol Chronicle—Altan Tobči, p. 39 (text), p. 117 (translation).

(16) W. W. Rockhll, 1900: p. 69. には、They have hawks and peregrine falcons in great numbers, which they all carry on their right hand. とあり、Rockhill の註記には、Here, of course, their hawks, eagles (barkut), and other hunting birds are meant. と、彼らの飼育する狩獵用猛禽の種類を明示している。

(17) 『祕史』二五節（卷一）。

(18) 『祕史』二七節（卷一）。

(19) 『祕史』二九節（卷一）。

(20) 『祕史』五四節（卷一）。

(21) W. W. Rockhill, 1900: p. 69.

(22) Рашид-ад-Дин; Сборник Летописей, Москва, 1952. т. I, кнг. 2, стр. 265.

(23) 例えば、Рашид-ад-Дин, 1952: т. I, кнг. 2, стр. 129. や『祕史』一九九節（卷八）などに明らかなほか、更に具體的にはチンギスハンの格言 bilig に「民の間にありては獸したる犢の如く、戰の時には狩りに放たれたる飢くし鷹の如くなるべく、叫喚の聲を以て事に當らざるべからず」（第十一項）とある〔B. A. Рязановский; Монгольское право (преимущественно обычное), ист. очерк, Харбин, 1931.（東亞經濟調査局譯『蒙古慣習法の研究』東亞經濟調査局、一九三五）十四頁〕。

(24) 『祕史』一八九節（卷七）。

(25) 『祕史』九節（卷一）。

(26) 村上正二「モンゴル帝國の成立と分裂」（『岩波講座・世界歴史九』所收）一九七〇年、九五頁。

(27) 村上正二氏は、蒙獵區となる地域は、亂獲防止のほか、部族の聖地や貴人の陵墓があるという事などによつても設定される、といわれる（村上正二譯註『モンゴル祕史・一』平凡社、

一九七〇年、二二頁)。

(28) A. Д. Каллиников は、「二十世紀の始めから蒙古に於てタルバガン(モルモットの一種)毛皮工業が非常に發達した。當時歐洲市場に於ても毛皮模造品用としてタルバガンに對する大需要が出現した」と述べている〔A. Д. Каллиников; Революционная Монголия, Москва, 1925.(安藤英夫・服部麥生共譯『外蒙古』生活社、一九三九年)七五頁〕がモンゴル人の間における需要は絶えずあったものと思われる。

(29) 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini; The History of the World-Conqueror, tr. by J. A. Boyle, 2 vols. Manchester, 1958. I. p. 27. Marco Polo,(和譯)I、一三三頁など。

(30) 獵將竟、則開一門廣半里、許俾餘獸得以逸去。不然一網打盡、來歲無遺種矣。

(31) 蕭大亨撰『北虜風俗』、「耕獵」。

(32) Juvaini, 1958 : I. p. 29.

(33) 『祕史』一一五節(卷三)。

(34) 『祕史』一七五節(卷六)。

(35) 『祕史』一九九節(卷八)。

(36) 如出征於中國、食羊盡、則射兎・鹿・野豕爲食。

(37) 『聖武親征錄』。なお『元史』卷一、太祖本紀にもみえる。

(38) 『祕史』一六四節(卷五)。

(39) 北客云、北方大打圍、凡用數萬騎、各分東西而行。凡行月餘、而圍始合。蓋不啻于餘里矣、……獲獸凡數十萬、……。

(40) 其俗射獵、凡其主打圍、必大會衆、……綿亘一二百里間…。

(41) 耶律楚材撰『湛然居士文集』卷十の「扈從冬獵」、「狼山宥獵」。

(42) Juvaini, 1958 : I. p. p. 27—29. に「大汗の大圍獵」についての詳細な記事がみえる。

(43) Ibid. I. p. 139.

(44) P. Pelliot; Notes on Marco Polo, 2 vols. Paris, 1959 (I); 1963 (II). I. p. 572.

(45) Ibid. II. p. 859.

(46) Ibid. I. p. 112.

(47) 「昔寶赤」がこれにあたる。『元文類』卷四十一、「鷹房捕獵」の條に、「國制自御位及諸王、皆有昔寶赤、蓋鷹人也」と記されている。

(48) Marco Polo,(和譯)I、一三四—一三五頁。

(49) Marco Polo,(和譯)I、一六九頁。

(50) Sinica Franciscana, vol. I. Quaracci-Firenze, 1929.(家入敏光譯『東洋旅行記』桃源社、一九六六年)一一〇頁。

(51) L. Krader; Social Organization of the Mongol-Turkic Pastoral Nomads,(Uralic and Altaic Series, vol. 20), Indiana University Publications, 1963. p. 66.

(52) W. W. Radloff; Aus Sibirien, 2 Bd. Anthropological Publication, 1968 (Nachdruck der Zweite Ausgabe, Leipzig 1893). I. s. 466. なおこの記錄は、キルギス族についてのものであるが、J. F. Baddeley によると Г. Н. Потанин は「キルギス族のスルタンは、大鷲 berkuts と鷹とによる狩獵を行なうのが彼らの地位に相應しい唯一の仕事であると考えている」と述べているという〔J. F. Baddeley; Russia, Mon-

gol, China, 2 vols. London, 1919 (rep. New York 1963). I. p.51]。また B. Spuler は、キプチャク汗國に於ても鷹狩り形式の狩りが盛んに樂しんで行なわれていたという (B. Spuler; Die goldene Horde, Die Mongolen in Rußland 1223—1502, Wiesbaden, 1965. s. 387.)。

(53) W. Heissig; Mongolische Volksmärchen, Düsseldorf-Köln, 1963. s. 30. "Ein Jägersmann"

(54) 『祕史』一七五節（卷八）。

(55) 邱處機撰『長春眞人西遊記』下卷に

天道好生。今聖壽已高。宜少出獵。墜馬天戒也。豕不敢前、天獲之也。

とある。また當然のこと乍ら、汗でさえ狩獵に危險がつきものであったことは、チンギス汗の例（『祕史』二六五節には、野馬の群 qulat を追ううちに落馬したという）のほか、Tolui の孫であり、第二代イル汗たる Abaqa が狩獵中に野牛に角で突かれて怪我をしたという記錄もある (J. A. Boyle (ed); The Saljuq and Mongol Periods, The Cambridge History of Iran V, London, 1968. p.360) ことからも窺える。

(56) 『元史』列傳卷二三、耶律楚材傳。なおここに參考として、決して豐かとはいえない『元史』太宗本紀を檢索してみると、太宗の卷狩りの記事は十一回現れる。卽ち、二年春（斡兒寒河）・四年十一月（納鄰赤剌溫之野）・五年八月（兀必思地）・六年春（斡兒寒河）同年冬（脫卜寒地）・九年春（揭揭察哈之澤）同年十月（野馬川）・十年夏（揭揭察哈之澤）・十一年春（揭揭察哈之澤）・十三年二月（揭揭察哈之澤）・同年十一月丁亥（地名書かず）——括弧内は地名——であるが、これも Ögödei qahan の狩獵に對する強い愛着を示すものといえよう。

(57) 『元史』本紀卷三、憲宗紀に

性喜畋獵。自謂遵祖宗之法、不踏襲他國所爲。

(58) 『祕史』二三二節（卷十）。

(59) 宇文懋昭撰『大金國志』、「田獵」。

(60) Juvaini, 1958: I. p.40.

(61) 『祕史』一七九節（卷六）。そこでは第一に Qučar、第二に Altan、次に Sača および Taiču が汗に推戴され乍ら、次々に卽位を拒否したのでやむなくテムジンが汗に選ばれたという。これは當時の汗の果すべき義務が、得るべき權利より遙かに大きかった爲であろう。

(62) Б. Я. Владимирцов, (和譯) 一八四頁。

(63) P. S. Pallas: Reise durch verschiedene Provinzen des Russischen Reichs, 3 Bd, St. Petersburg, 1771—1776 (Nachdruck, Graz, 1967). III. s. 204.

(64) 『祕史』七二節（卷二）。

(65) 『祕史』一二六節（卷三）。

(66) 『祕史』八二節（卷二）。

(67) 例えば Dobun Mergen が Ma'aliq Bayya'udai から燒肉と交換にその子供を得ている〔『祕史』一四—一六節（卷一）。なお村上正二氏は、これは個人の寄身というよりは、むしろ Bayya'ud 族の隸屬の過程を傳承の形で說明しようとしたものである、といわれる（『モンゴル祕史』I、二八頁）。〕。

(68) 『祕史』九十—九二節（卷一）。Bo'orču は「好き友に助と

ならんとて」自發的に nökör となったのである。これは從って本來的には如何なる隸屬關係をも意味するものではなく、雙方の相互的かつ對等の關係であった。それは Bo'orču が、テムジンの申し出た援助に對する返禮を拒否していることからも明らかであろう。

(69) 『祕史』九七節（卷二）。J̌elme の父親 J̌arci'udai は「今者勤蔑に鞍を置かせ、門を開けさせよ」とテムジンに言うが、これは近侍的な地位に就けられることを期待しての言葉であろう。

(70) 記載順にいうと、一一四節（卷三）の Kučü、一一九節（卷三）の Kököčü、一三五節（卷四）の Šikiken-quduqu、一三七節（卷四）の Boro'ul となるが、一三八節（卷四）では、Hö'elün eke の「養子四人」として總括されている。彼女は「子どもに、晝は視る目、夜は聽く耳と誰にならしめんか」と言い、實の子の如く「家の內に養」い、彼らはのちチンギス汗の最も重要な側近となるに至るのである。

(71) Рашид-ад-Дин, 1952 : т. I, кнг. 2, стр. 90.

(72) 『祕史』一八八節（卷七）、二〇〇節（卷八）など。そこでは「正主の君」tus qan を捨てた者が斬殺されている。

(73) 「正主の君を廢てかねたる汝等の心善くあり」（『祕史』一四九節）、「正主の君を廢つる能はずして『命を助かり逃去れ』と云ひ、禦ぎ合ひたる丈夫にて彼はあらずや。伴となるべき人なり」（『祕史』一八五節）など。

(74) 『祕史』一二〇—一二三節（卷三）のいわゆる第一次即位の際に投じた部分は非常に厚遇され、特に個人に對しては殆ど千戶の官人に任じて報いている。

(75) Juvaini, 1958 : I. p. 205（ヤッサに背き沐浴した回教徒の助命）、I. p. 211（水瓜獻上者に對する眞珠の耳飾り下賜）など。

(76) 『元史』本紀卷三、憲宗紀に

（八年）五月、皇子阿速帶因獵獨騎傷民。帝見譲之。

(77) В. Д. Греков, А. Ю. Якубовский ; Золотая Олда, Очерк историй Улуса Джучи в период сложения и расцвеста в 13 и 14 веках, Ленинград, 1937.（播磨檜吉譯『金帳汗國史』生活社、一九四二年）に「狩獵は金帳汗國の蒙古人の經濟生活において重要な部門で、狩獵の場合は封建的從屬の位置にある生產者は、自己の主人に對し辛い義務を負はされる」という（八八頁）。

(78) Juvaini, 1958 : I. p. 27.

(79) 例えば、註(23)および(80)の二著書など。狩獵の軍事演習としての性格は G. Vernadsky によっても強調されている（G. Vernadsky ; The Mongols and Russia, (A History of Russia vol. III), Yale University Press, 1953. p. 113）。

(80) В. А. Рязановский ; Fundamental Principles of Mongol Law, Tientsin, 1937.（青木富太郎譯『蒙古法の基本原理』生活社、一九四三年）二〇一頁。

(81) Juvaini, 1958 : I. p. p. 27—29.

(82) 耶律楚材撰『湛然居士文集』卷十、「扈從冬獵」。

(83) Б. Я. Владимирцов,（和譯）七五頁。

(84) この方面に關するソヴィエト聯邦の考古學の精力的な活動は多くの發見を齎した。バイカル湖周邊地域の А. П. Оклад-

ников らの調査は有名である。 Ринчен (эмхэгтэв); Монгол нутаг дахь хадны бичгэс гэрэлт хөшөөний зүйл, Улаанбаатар, 1968. А. П. Окладников, В. Д. Запорожская; Петроглифы Забайкалья, I.II. Ленинград, 1969, 1971. А. П. Окладников; Олень золотые рога, 1964. (加藤九祚譯『黃金のトナカイ』美術出版社、一九六八年) など。

(85) Ф. А. Кудрявцев; История бурят-монгольского народа, М.-Л. 1940. (蒙古研究所譯『ブリヤート蒙古民族史』紀元社、一九四三年) 一六頁。なおこれは F. Engels の言葉〔F. Engels; Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats. (戸原四郎譯『家族・私有財產・國家の起源』岩波文庫) 三三頁〕を襲ったものであろう。

(86) 『元史』卷六三、地理六、西北地附錄に

隨水草畜牧、頗知田作。遇雪則跨木馬逐獵。

(87) 同前書、同卷に、

野獸多而畜字少、……冬月亦乘木馬出獵。

また『祕史』では、乞兒吉速・合卜合納思として「拙赤の北征」の際に降附した「森林の民」の内にみえる(二三九節、卷十)。

(88) William of Rubruck も指摘する如く、毛皮には貨幣的價値があったからである (W. W. Rockhill, 1900: p. 202)。

(89) В. Д. Греков, А. Ю. Якубовский (和譯) 八八頁。

なお、多くの研究によって示されたように、チンギス汗を生んだモンゴル部族は、元來 Silka, Argun 兩河が合する森林地帶に住んでいたのであって、ウィグル帝國の滅亡の後、モンゴリア高原の草原地帶に進出したのである(愛宕松男「北方民族はなぜ中國に進出したか」歷史教育、一八―二、一九七〇年。村上氏前揭岩波論文、一九七〇年)。この事情からして、モンゴル部族が草原地帶に根據しているとはいっても、まだまだ「森林の民」的な慣習・價値觀を持ち續け(『祕史』を一讀してみても、チンギス汗の系譜自體に「森林の民」的要素が色濃く影を落していることがわかる)、經濟體系にまで及ぶ巨大な潛在的規制を受けていたものと考えられる。それ故、彼らが遊牧經濟を成り立たしめる經濟的營爲として、長い傳統を持ち、既に充分手なれた狩獵を持續して行なったであろうことは想像に難くない。

(90) 其食肉而不粒。獵而得者、曰兎、曰鹿、曰野彘、曰黃鼠、曰頑羊、曰黃羊、曰野馬、曰河原之魚。

(91) 四五歲挾小弓短矢。及其長也、四時業田獵。

(92) 其俗牧且獵、衣以韋毳、食以肉酪。

(93) John of Plano Carpini のモンゴル人の狩獵についての觀察は、C. Dawson (ed.); The Mongol Mission, The Makers of Christendom Series, New York, 1955. (護雅夫譯『カルピニ、ルブルク中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、一九六五年) の二一一―二二頁にみえる。

(94) So it is that they procure a large part of their food by the chase. (W. W. Rockhill, 1900: p. 70.)

(95) Ibid. p. 69.

(96) J. A. Boyle (tr.); Kirakos of Ganjak, (CAJ, VIII—3)

1963. p. 201. Kirakos of Ganjak (1201—1272) は、一二五四年 Hethum I, King of Armenia が Qaraqorum に朝貢した時に隨伴した。

(97) Marco Polo, (和譯) I、一四八頁に、「彼らの常食は肉と乳、それに狩獵の獲物であるが、夏むきならこの邊り至る所の原野に數多いファラオネズミも捕えて食料に供する」とある。

(98) 例えば、Г. Н. Потанин; Очерки северо-западной Монголии, СПб, 1881—1883. (東亞研究所譯『西北蒙古誌』第二卷、民俗・慣習篇、龍文書局、一九四五年) には、「多くのものは他に食物がないので、狐や齧齒類をいや應なしに食べている」(一〇〇頁) と言い、「富んでいない人々の重要な代用食品は、モルモットの肉であり、稀には、これに似た齧齒類の肉である」(一一九頁) とも言う。J. H. Miller は、モルモット狩りを專業にしている狩人がおり、その人々の食料はモルモットや野生羊の肉であったと言う (D. Carruthers, 1914: II, p. 342.)。

(99) 例えば『史記』匈奴傳に、

兒能騎羊、引弓射鳥獸。少長則射狐兎、用爲食。士力能彎弓、盡爲甲騎。其俗寬則隨畜、因射獵禽獸、爲生業。急則人習戰攻、以侵伐、其天性也。

また『舊唐書』北狄傳の室韋の項に、

兵器有角弓楛矢、尤善射。時聚弋獵、事畢而散。

(100) В. В. Бартольд; Туркестан в эпоху монгольского нашествия, СПб, 1900. (T. Minorsky (tr.); Turkestan down to the Mongol Invation, 3rd edition, London, 1968.) p. 386. S. Jagchid, C. R. Bawden; Notes on Hunting of Some Nomadic Peoples of Central Asia, (前掲論文) p. 91. E. D. Phillips; The Mongols, London, 1969. p. 28. Б. Я. Владимирцов, (和譯) 八七頁。江上波夫『ユウラシア古代北方文化』全國書房、一九四八年、八二頁。後藤富男『內陸アジア遊牧民社會の研究』吉川弘文館、一九六八年、一六五頁。

(101) 岩村忍『モンゴル社會經濟史の研究』京都大學人文科學研究所、一九六八年、三三頁。

(102) 森林の狩獵民の行なう狩獵は、一般的にいって動物に對する深い宗教的觀念を伴って愼重に行なわれた〔Uno Holmberg; Finno-Ugric 〈and〉 Siberian 〈Mythology〉, Mythology of All Races IV, Boston, 1964 (rep.). p. 467 C. M. Широко́ров; Social Organization of the Northern Tungus, Shanghai, 1929. (川久保悌郎・田中克己譯『北方ツングースの社會構成』岩波書店、一九四一年) 八三頁など〕が、「草原の民」の狩獵は一定の資源保護の規制を前提として、なるべく多量の獲物を得ることを至上の目的としており、獲物への特殊な感情は比較的稀薄であると思われる〔例えば Juvaini によると、大汗の催す大圍獵では「偵察者」の重要なる任務は獲物の多寡を知らせることである (Juvaini, 1958: p. 27) という〕。

(103) 岩村氏前掲書、三〇頁。

(104) Marco Polo は「冬の間、タルタール人は家畜を養うに足るだけの牧草に惠まれている溫暖地方の平原で暮らす。しかし夏になると、彼らは山地や溪谷といった涼しい土地に移動する」

という〔Marco Polo,（和譯）I、一四七頁〕。

(105) 『祕史』に現れる狩獵の記事には、狩獵中に他部族の者と遭遇したというもの（五四節、一九〇節）、或は戰鬪に伴って糧食を得る目的で「ゆくゆく」獸を卷狩りしたというもの（一一五節、一七五節）などがみえる。

(106) B. A. Рязановский,（和譯、一九三五年）一四頁。bilig の第十條にみえる。

(107) 同前書、一一頁。

(108) 韃人生長鞍馬間、人自習戰。

(109) 左旋右折如飛翼、故能左顧而射右。これは、いわゆる Parthian Shot の類ではなかろうか。Parthian Shot については、江上波夫「漢代の狩獵・動物圖樣」（『アジア文化史研究・論考篇』〈山川出版社、一九六七年〉所收）、相馬隆「安息式射法雜考」（史林、五三―四、一九七〇年）などに詳しい。

(110) 『祕史』七七節（卷一）。

(111) C. Dawson,（和譯）二三頁。

(112) 例えば「ステップの野獸はカモシカを見てもわかるように敏捷で脚が速い。しかも獵人が身を隱すべき場所もないため、ここでは狩獵生活が成り立たないのである」（岩村忍『元朝祕史』中央公論社、一九六三年、九頁）というような見解は、モンゴル遊牧民のすぐれた機動性と統制ある集團行動の可能性を餘りにも輕視したものといわざるをえず承服しがたい。

(113) それは家畜竊盜が嚴罰の對象となった事（後藤氏前揭書、一九六八年、二二六頁）や、「モンゴル人は家畜のおかげ（で生きている）。モンゴル包は綱のおかげ（で立っている）」という諺からも窺える〔A. Mostaert; Textes oraux Ordos,（Monumenta Serica, Monograph Series No. 1）Peiping, 1937, p. 548. 磯野富士子氏譯文（『オルドス口碑集』）による〕。

(114) 特に疫病、及び冬期の積雪と春の訪れの直前の榮養失調による大量斃死は多くの記錄にみえる如く稀なことではなかった。

(115) 後藤富男氏は定期的な屠殺の例として「牧民は毎年冬營地に移った直後、わが家の越冬食料として數頭の羊を屠る。十一月を屠殺月と呼ぶのはこのため」であるといわれる（後藤氏前揭書、一九六八年、六二頁）。それは冬越しの苛酷な條件の爲に、通常は屠殺することなく得られる乳製品を家畜が產出できなくなるという事情によるものであった。

(116) W. W. Rockhill, 1900 : p. 63.

(117) Ibid. p. 64. 『祕史』にも保存用とする肉の製法を示唆する記事がみえる（一九節、二七節）。

(118) 『祕史』二六節（卷一）。

(119) A. M. Позднеев, II. 1898 : стр. 477.

(120) А. Д. Калининков,（和譯）六五頁。

(121) 「蒙古の牧業は、牧民の衣食住のすべてにわたってその必要とするものを供給するが、同時にそのすべてにわたって完全なる自給自足は不可能である」（後藤富男『蒙古の遊牧社會』生活社、一九四二年、五四頁）

(122) 例えば商業活動や、それに對する何らかの形での關與、更には自然的條件が許す地域における農耕なども同じ視角から論じうるのではないかと思われるが、ここでは觸れない。

(123) Б. Я. Владимирцов,（和譯）七五頁。